

「三つの中国」の時代

カリフォルニア大学ロサンゼルス校 中嶋 嶺雄 なかじま りゅうゆう

現在、東アジアがさまざまに論議されているけれど、脱冷戦と脱社会主義という歴史の大転換を前提に現在のアジアを考えた場合、東アジアの中でも、特にそこに広がる「中国的世界」を無視することはますますできなくなっている。

この「中国的世界」は、十一億の人口を持つ中華人民共和国、人口はわずか六百万弱とはいえ、日本を除けばアジアの中でも最も高水準の経済的豊かさを達成している香港、そしてアジアNIESの中でもっとも強い経済力を有し、人口一千万という国際社会全体の国民国家のレベルからみると十分にその適正規模を有している台湾から成り立っている。あるいはここに東南アジアに広がる華人世界を加えてもよいのだが、さしあたり私は中国、香港、台湾という「三つの中国」によって形成されている「中国的世界」が、確実にその経済的、社会的インパクトを強めようとしている時代になりつつあることを指摘しないわけにはいかない。

もとより、中国、香港、台湾の間には、政治的にはもとより、経済的にも社会的にも大きな相異や格差、また相互の摩擦や対立がある。しかし、全体として見ると、そうした差異や亀裂を含みながら、「中国的世界」が結果として相互浸透的に拡大しつつある現実を忘れてはならないであろう。

そのようなとき、去る五月十八日、世界銀行は「世界経済の展望と途上国」と題する報告書をまとめ、その中で、二〇〇二年には中華人民共和国、香港、台湾から成る「中国圏」がアメリカを追い抜いて世界一の経済規模になるという大胆な予測を試みた。折からアメリカでは中国などにたいする最惠国待遇(MFN)問題で論議が沸騰していることもあって、世界銀行の報告書について

も早速、賛否両論が生じている。この予測は中国の人民元の換算レートを過度に評価しすぎており、しかもこの十年余にようやく経済成長を始めた中国大陸と、過去三十年にわたって成長を続け、すでに一人当たりGNPが二万米ドルを越えて先進国水準に達している香港、台湾を一緒にし、しかも鄧小平以後の中国の政治的不安や香港返還問題、台湾の将来といった重大な政治的イシュー(issue)を一切除外しているので、とうてい信用できないという批判も目立っている。しかし、中国を香港、台湾を含む「中国圏」と見做す視点は、たしかに重要であり、この点は評価されてよいように思う。

ところが、これからの時代はまさに社会主義の崩壊とともに脱冷戦の時代でもあり、そして全世界的には経済中心の時代なのである。そうした経済のサイズで考えてみると、我々の地理的觀念としての中国認識、あるいは人口の大きさだけから見ると中国認識を、根本的に組み替えて再考しなければならなくなっているといえよう。むしろ中国、香港、台湾という「三つの中国」がほぼ拮抗して存在する現実が、今後ますます無視できなくなってくるのだ。すでに見たように、人口をたとえば、かたや十一億の中国、香港は多く見積もっても六百万という中国のわずか二百分の一の存在であり、また台湾は六十分の一の人口二千万というサイズであった。このように大きな格差がある。しかし、経済指標として最も重要な一人当たりのGNPで見ると、一九九二年末現在の概略数値で最も成績のいいのが香港の一万二千五百米ドル、次いで台湾が一万米ドル、中国は約三百五十米ドルで、膨大な人口を抱える巨大な中華人民共和国は著しく落ち込んでしまう。

外貨準備高で見ると、この「三つの中国」の中で、台湾は飛び抜けて成績がよい。よく知られているように、台湾の外貨準備高は一九九二年六月末現在で八百六十八億米ドルと、日本、アメリカを抜いて世界一になっている。もちろん、外貨準備高は経済情勢に応じてつねに変動するものであり、外貨準備高がむやみに多いほどよいというものではないけれど、しかし、台湾の力強い経済力の指標としては、この実績が高く評価されるべきである。中国はこのところ盛んに輸出ドライプをかけ、一九九二年は約百八十億米ドルと大幅な対米貿易黒字を稼いで外貨準備高を確保することに努力しているが、それでも台湾の半分程度の四百億米ドル台だと言っているだろう。香港の場合は、為替管理がない自由な経済地域なので、外貨準備高はこれまで明確に算定されてこなかったが、一九九二年七月十五日、香港政府は香港の歴史始まって以来初めて、外貨保



有高を公表した。それによると、香港の外貨保有高は一九九一年末で、世界第一位に相当する「百九十億米ドルに達した」といわれている。この額は、最近、外貨が急増している中国よりは少ない、世界第一位である台湾の八百六十八億米ドルにはとても及ばないにしても、香港が外貨準備高においてもかなりの地位にあることを見せつけた。したがって台湾、香港に中国を加えた「三つの中国」では、約千五百億米ドルを上回る外貨を保有しているという膨大な規模になる。

World Now

貿易総額で見るとどうだろう。私はこれが最も重要な指標ではないかと思う。つまり、世界市場やアジア地域にどのような形で物資や資金が動いているかを即座に反映しているからである。一九九一年の実績から見ると、台湾の貿易総額は約千四百億米ドル。これに対して中国はおよそ千三百億米ドルだから、ここにもほぼ拮抗する。「三つの中国」の実態が反映されているといえよう。香港は二千億米ドル前後の貿易総額を達成したが、香港の貿易総額が急増したのは、特に台湾からの輸入が増えているからである。その大部分は大陸へ再輸出されているので、この点でも台湾の製品が香港を経由して大陸に流れていく状況を見てとることができよう。台湾は、このところ内需主導型に転換しつつあることもあって、一九九二年の貿易統計では八年ぶりに貿易黒字が減少し、貿易の伸びも減少したが、対香港貿易のみは対前年比約三〇%増の貿易黒字を計上し、百三十億米ドルもの対日貿易赤字を補っている。これにたいして中国は、千六百五十六億米ドルと対前年比二二%も伸びて、千五百三十五億米ドルの台湾を五年ぶりに上回った。また香港は二千四百億米ドルで依然として中国、台湾を上回っているが、城内需要の伸びによる輸入の増大と香港資本による中国南部への生産拠点の移動による地場輸出の減少によって、貿易赤字が拡大した。しかし、いずれにせよ、貿易総額から見ても、まさに「三つの中国」がほぼ拮抗して共存し、存在している時代であることを示している。

いう問題にあまりにも気を使わずに、現実にはこの「三つの中国」が相補いながら、「中国的世界」を日一日と拡大していることにあまり気がなかつたといえよう。その意味では、日本やアジアNIEsの経済発展にばかりに目を奪われずに、「中国的世界」が現実にも相互浸透的に拡大していること、特に香港の影響は広東省から華南一帯に及び、そして台湾の影響は福建省からやがては華南、華東地区にまで進展しつつあることにもっと注目を寄せてもよいのではないかと考える。

同時に、こうした状況の中で、いかにこの「三つの中国」的世界を調和的にアジアの国際システムの中に受け入れていくかが、これからの国際社会、特に日本にとっての重要な外交課題になるはずである。

将来は、世界の人口の四分の一を占める二十億人以上の「中国的世界」という図式も考えられるほど「三つの中国」は大きな存在である。この「三つの中国」の中で香港や台湾はすでに先進国の仲間入りをしつつあるが、さらに中国大陸が徐々にティク・オフしてゆき、巨大なGNPを産出するようになったときの人類の将来を考えてみると、それは決してハッピーな予測だけではない。

例えば地球環境破壊につながる公害問題一つをとっても、中国がこのままのかたちで「公共哲学」や「国境を越える義務」に無関心なままひたすら経済成長を続けていくならば、それは人類社会にとっても大変深刻な問題になる。いまのところ、中国の経済は極めて低いレベルからようやく急激に成長し始めた段階なので、私たちは当面救われているのだが、「三つの中国」的世界の無限的な拡大は、この点でもさまざまな問題を惹起することにもなる。

中華人民共和国は現在、ポスト鄧小平体制への歴史的移行期にさしかかつており、また一九八九年の六・四天安門事件に示されたように政治的・社会的な不安定が根底に存在している国家である。急速な経済成長局面への移行の中でさまざまな社会的矛盾が露呈しており、公害問題をはじめとする地球環境の保全に尽くすだけの余裕はほとんどない。ましてや、人権をあのようには抑圧している中国に、地球環境の問題に対処し得る精神的基盤は存在しない。だとするならば、中国自身がみずからの社会をコントロールし、マネジメントし得るような開かれた中国、成熟した中国社会になつてゆかない限り、この問題は極めて深刻な影響を周辺諸国のみならず、全世界にもたらすことになると思われる。

そうした中で、香港や台湾の存在が中国社会に与えるインパクトはますます大きくなりつつあり、それは日本をはじめとする西側諸国がなし得ないような中国社会改造への大きな貢献をなすことになるかもしれない。その意味でも、これからはまさに「三つの中国」の時代だといえるのではなからうか。

※ここに展開した論旨は、七月下旬刊行予定の「三つの中国―迷霧と相反―」(中嶋謙雄著/日本経済新聞社)に詳しく述べられています。

Y A E S U L E T T E R

八重洲
LETTER
QUARTERLY INFORMATION

1993 No.11

World Now

「三つの中国」の時代

New Wave

「モノ語り」の行方

エディタース・トーク

GLOBAL BUSINESS

メセナ

サンヨー鳥声拡声装置

誌上ブックフェア

100万人の住宅

Book Review

海外新刊紹介+国内新刊紹介

Information/Y.B.C.Best Seller

